

ネヘミヤ記13章4-5節 「妥協という敵」

1A 敵との婚姻

1B 城壁建設に反対した敵

2B 裏門から入る敵

2A 礼拝の倦厭

1B 十一の捧げ物の停止

2B 安息日の商売

3A 祭司の罪（マラキ書）

1B 神の愛への不信

2B いけにえの軽蔑

3B 不信者との婚姻

4B 善を行なうことへの倦怠

4A 喜びの回復（コリントとガラテヤ）

1B 不信者とのくびき

2B 御霊の洗い

3B 御霊の実

アウトライン

ネヘミヤ記 13 章を開いてください、私たちは午後礼拝でネヘミヤ記を読み終えます。10 章から 13 章までを読みますが、今朝は 13 章 4-5 節に書かれてあることを中心にしてお話ししたいと思います。

4 これより以前、私たちの神の宮の部屋を任されていた祭司エルヤシブは、トビヤと親しい関係にあったので、5 トビヤのために大きな部屋を一つあてがった。その部屋にはかつて、穀物のささげ物、乳香、器物、および、レビ人や歌うたいや門衛たちのために定められていた穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一、および祭司のための奉納物が保管されていた。

城壁再建の工事のために、ペルシヤ王アルタシャスタの献酌官であったネヘミヤは、十二年の間、ユダヤの総督としてエルサレムにいました。王との約束の時が来たので、彼は王のところに戻りました。たぶん二年ぐらいだったのでしょうか、再びエルサレムに戻ってきましたが、その間に起こっていたことがこれです。

1A 敵との婚姻

1B 城壁建設に反対した敵

エルヤシブが大祭司でした。彼は、城壁再建工事に携わっていた人でもあります。「こうして、大

祭司エルヤシブは、その兄弟の祭司たちと、羊の門の再建にとりかかった。(3:1)」とあります。

そしてトビヤは、城壁工事を何とかして阻もうとした張本人であります。仕事にとりかかろうとしたユダヤ人たちに対して、「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。(2:19)」と言って蔑みました。工事がはかどっている時には、「彼らの建て直している城壁なら、一匹の狐が上っても、その石垣をくずしてしまうだろう。(4:3)」と言って嘲りました。城壁の高さが半分ぐらいになった時には、非常に怒り、サマリヤの総督サヌバラテなどと共に、エルサレムに攻め入り、混乱を起こそうと陰謀を企てました(4:8)。壁は破れ口がなくなり、残るは門の扉を取り付けるだけになりましたが、ネヘミヤを連れ出して会議をしようと誘い出し、彼に害を加えようと企てていました(6:2)。そして何と、預言者を買収して、その偽預言によってネヘミヤに罪を犯させようとさえしたのです。

このトビヤが何と、神の宮にある捧げ物のための保管所に大きな部屋があてがわれて、そこに住んでいると言うのです！あまりにもあってはならない、衝撃的なことが起こっています。

その理由が「トビヤと親しい関係にあった」と書いてあります。トビヤは、ユダヤ人の何人かと縁戚関係にありました(6:18)。そして、トビヤと共に城壁再建工事に強硬に反対したサヌバラテが、なんと大祭司エルヤシブと縁戚関係になっていたのです。エルヤシブの孫息子が、サヌバラテの娘と結婚していたのです(13:28)。肉のつながりは、しばしば神とのつながりを奪い取ってしまいます。神の目的よりも、肉のつながりの利害を優先させるのです。イエス様は、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。(マタイ 10:37)」と言われました。この結婚によって、エルサレムの中に、そして神殿の中枢にまで浸透してきていました。

2B 裏門から入る敵

これまでネヘミヤ記を読んできた方は、「なんで…」というショックを隠せないと思います。あれだけ戦って、ネヘミヤは城壁再建を成功させたのです。これはまるで、正面玄関を固めたのですが、裏口から入られてしまった状態です。敵は、「押してもだめなら、引いてみる」という手法を使います。つまり、神の働きに反対することに失敗したら、仲良くなることによって中に入ってくるのです。

これを言い換えれば「妥協」という武器であります。敵は、主の命令に少しかだけ従えばそれで十分だという妥協案を提出します。パロがモーセに対して、「いけにえを捧げてもよいが、遠くに行つてはならない」と言い、「あなたがたは、幼子は連れて行かず、壮年だけでいけにえを捧げなければならぬ。」とも言いました。しかし、主が命じられたことの全てを守らなければ、全く守っていないのと等しいのです。しかし敵は妥協をさせることによって、私たちのうちにある神の聖さを汚そうとします。

2A 礼拝の倦厭

1B 十一の捧げ物の停止

トビヤが中に浸透したのが、親しい関係であったことは分かりましたが、なぜ、その中に部屋を持つようなことができたのでしょうか？そこは保管所ですから、捧げ物があつてしかるべきなのです。しかし 10 節を見ますと、レビ人が自分たちの農地に戻って行ってしまったという事実が書いてあります。彼らが神殿で奉仕をするにも、十一の捧げ物がユダヤ人から携えてこられていなかったため、彼らは生活に困って戻ってしまったのです。つまり、人々が神への礼拝をやめてしまっていました。それで、神殿にあつた捧げ物の保管庫にも穀物等は入らなくなり、そこに大きな部屋をトビヤのためにエルヤシブがあてがうこともできたのです。つまり、礼拝そのものが疎かにされた結果でありました。

2B 安息日の商売

そして、安息日も疎かにされていました。安息日に売り買いしている者たちがいました。ツロから来た商売人もいて、安息日にエルサレムの城壁内で商売までしていたのです。これも、神殿における礼拝を横に置いた表れでありました。

つまり、神への礼拝が疎かにされた時に、すべての事がなし崩しになってきたのです。神への礼拝が固守できない時に、自分の生活の中でたちまちこの世がなだれ込んでいきます。そして、この世と全く変わらなくなり、キリスト者であるという意味が見いだせなくなってしまうのです。

3A 祭司の罪（マラキ書）

ユダヤ人たちが礼拝を疎かにした、その原因は祭司たち本人にあつたようです。大祭司エルヤシブを始めとする祭司たちが、どのように主の心から離れていったのか、その姿を描いているのが、この時期に預言をしたマラキであります。マラキ書を読めば、礼拝から徐々に心が離れていく姿をはっきりと見ることができます。

1B 神の愛への不信

1 章 2 節にこうあります。「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。…主の御告げ。…わたしはヤコブを愛した。」礼拝に喜びを無くした、楽しくなくなったというすべての原因はここにあります。神が自分たちを愛しておられるという確信が揺らぐ、その意識が薄れるときです。

何か良いことが起こると神が自分を愛してくださっていて、悪いことが起こるとその愛の手を引いてしまわれた、と思います。しかし聖書は、そのようなところに神が愛を置いているのではないことを教えています。十字架に置きました。神は、私たちが罪から離れ、聖くなることにその愛を置いておられます。そのために、キリストに罪を負わせて、血を流させ、私たちの罪を取り除いてくださ

ったのです。この基本を忘れて、何か違うものを求めていく時に神の愛から離れてしまうこととなります。

2B いけにえの軽蔑

神が自分たちを愛しておられることに確信が持てなくなってきた祭司たちは、当然、神への愛も冷えてきます。いけにえを疎かにし始めました。「あなたがたは、盲の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。足なえや病気のををささげるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところに行き、それを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。(1:8)」上に立つ人に対して捧げることなど到底できないような捧げ物を、神に対しては平気で捧げるようになっていました。最上のいけにえでなければいけないのに、残り物を捧げるようになってきたのです。

私たちの礼拝が、全き心、全き信仰になっておらず、口で歌っていること、また告白していることが、どこか心から遠く離れていく時に、残り物を捧げていることが起こっています。一週間で起こることは主日の礼拝から始まることであり、そして次の主日に至るという礼拝中心の生活ではなく、一週間で起こることがいろいろあって、それで時間があつたら礼拝に参加しようかという付け足しのものになったら、それも残り物の捧げ物です。

そして、礼拝が非常に煩わしいものになっていきます。祭司たちは、「『見よ。なんとうるさいことか。』と言って、それを軽蔑する。(1:13)」となっていました。毎回、毎回、同じように礼拝は信仰する。そして、いつも同じ活動だ。同じことの繰り返しは辛い、煩わしい、となってしまうのです。

3B 不信者との婚姻

ついに祭司たちは、この世が楽しくなって、この世に手を出します。それは女です。何か楽しいことがないかな、と思って、その淋しさを紛らわしてくれるのは女であります。それも、神を愛する女性ではなく、この世のことを良く知っている女であります。そこで、2章11節に書いてありますが、外国の女と結婚するのです。そして、なんと祭司の家族の中からめとった女と離縁するのです。「あなたがたは、涙と、悲鳴と、嘆きで、主の祭壇をおおっている。(2:13)」とあります。

自分の一番身近にいる、主を愛する人をないがしろにし始めたら、それは霊的危機の始まりです。自分の伴侶でなくとも、教会でいつも時間を過ごしている兄弟姉妹との交わりが楽しくない、と思えば危険信号です。代わりに自分の淋しさや空しさを補完してくれる親密な関係を求めるようになります。しかしテモテ第二2章22節に、「それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」とあります。

4B 善を行なうことへの倦怠

そして彼らは、「悪を行なう者もみな主の心になつていく。(2:17)」とつぶやきました。なぜなら、

自分たちが良いことを行なっても、何ら報いがないではないか。悪いことを行なっている者も、祝福されているようだ、と思うわけです。いいえ、愛の行ないは必ず報いがあります。「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。(ヘブル 6:10)」

4A 喜びの回復 (コリントとガラテヤ)

以上のような経緯があって、大祭司エルヤシブや他の祭司たちの中で霊的倦怠が起こり、世のものを自分たちの中に取り入れてしまいました。

1B 不信者とのくびき

新約時代の教会において、妥協があってはならないことを教えている箇所があります。「**不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。(2コリント 6:14-15)**」

私たちの愛は、一義的に神との愛が至上のものとなっていなければいけません。ところが、「私はイエス様を愛していますが、これこれのことも大事ですから。」と話します。それは一見、心が広いように見えます。神だけに固執しない、偏狭ではない心に思えます。他に大事にしているものが、必ずしもあからさまな罪と呼べるものではない、いや良いことであるかもしれません。しかし、すべての良きものは神から、そしてイエス様から流れるのです。この方を第一として、この方だけになる時に、その他の事柄が自分から命として流れ出るのです。

そして次に私たちの愛は、次にキリストにある兄弟姉妹との間にあるものでなければいけません。同じように神のものとされた者たちを愛するのが次に大事です。イエス様の至上命令は、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」というものでした。兄弟となった者を愛するということは、まさに神を愛することに他なりません。そして神を愛する時に兄弟を愛するのです。神を愛して、兄弟を憎むということは不可能なのです。いやできる、という人は自分自身を偽っています。

神を愛して、霊の兄弟を愛して、それから初めて未信者を含む隣人に対して愛を示すことができます。神だけの愛になっているから兄弟を愛せし、兄弟と愛し合う仲にいるから始めて、周囲にいる未信者の人々を愛していけるのです。ここで、神と他人への愛を同等に置くからおかしくなるのです。それが、パウロがここで話している「交わり」であり、不信者と同じ頸木を負えない、と続くのです。交わるのは神とのみ、そしてキリストにあって他の兄弟姉妹とのみになります。

2B 御霊の洗い

私たちに襲ってくる、世の価値観はどのようなものがあるのでしょうか？新約時代の教会に対して、

これらが世であり悪であると並べているものがあります。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。(1コリント6:9-10)」教会の中に、私たち信者の間にこれらの事柄が入り込んできます。今、話したように、これは主への礼拝、神のみを愛することから離れてしまった結果です。

しかし、パウロは処方箋を与えています。次を読みましょう。「あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。(6:11)」これが処方箋です。やはり主への礼拝です。神が、キリストによってしてくださったことを仰ぎ見ることは、神への礼拝です。主イエス・キリストの御名と御霊によって、私たちを洗い、聖なる者としてくださり、義と認めてくださったのです。こんなにも素晴らしいことをしてくださいました！この真理を受け入れる時に、主を喜ぶ、喜びが回復されます。

3B 御霊の実

もう一つ読みましょう。不信者との交わりが列挙されているところを読みます。「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。(ガラテヤ5:19-21)」ここにある肉の行ないの列挙は、いくつかに分類できますね。

一つは性的な汚れです、「不品行、汚れ、好色」とあります。私たちは、これらの汚れに取り囲まれながら生きています。いとも簡単に私たちはこの中に入っていきます。次は霊的な汚れです、「偶像礼拝、魔術」とあります。これも至るところにあります。葬儀など儀式的なものに参加しなければいけない事柄もありますが、テレビでは超自然現象、オカルト、そして占いもあります。そして次は長い列挙ですが、知的高慢と言ったらよいでしょうか「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」であります。これらのことを行なうのは、すべて「私が正しい」と言い張るところに存在します。そして党派心とあるとおり、自分のほうが聖書的だ、相手は墮落している、逸脱していると判断します。そして最後は無節制です、「酩酊、遊興」とあります。

なぜ、このようになものに陥ってしまうのか？これもまた同じです、礼拝が疎かにされているからです。そこでパウロは、これらの肉の行ないに打ち勝つ処方箋を次に打ち出しています。「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。(5:22-23)」不品行ではなく、神の愛を求めます。敵意ではなく、主にある喜びと平安を求めます。分派ではなく、寛容を求めます。酩酊ではなく、自制を求めます。聖霊を求め

れば、聖霊様はこれらの聖霊の実の特質の中で私たちに豊かに満たしてくださるのです。

どうか神を求めなさい。神のみを求めてください。妥協の反対は何になるでしょうか？妥協にどのように対抗すればよいでしょうか？パウロは続けて第二コリント 6 章で教えます。「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主は言われる。(17-18 節)」そうです、「分離」がその反対です。神との愛の関係で邪魔になっているものがあれば、それを取り除くことです。心から悔い改めて、主に自分の印籠を明け渡します。そうすれば主が、ここに書いてあるように豊かに憐れみの御霊を注いでくださって、あなたはわたしの息子、あるいは、あなたはわたしの娘と呼んで、親しく臨んでくださるのです。